

南島周遊 Field Walker or Flaneur

岩川 亮（国際文化学科 准教授）

先日、朝日新聞日曜版の書評欄に赤坂憲雄と R. A. モースが編集した『世界の中の柳田国男』という本が紹介されました。今日は南島の話をしたと思っているのですが、日本語の世界だけではなく、それ以外の様々な世界に沖縄や南島に関する研究が広がっていったときに、それをどういうふうにして私たちが取り入れていくかということがこれから先、けっこう必要になるのではないかと考えています。

その他にも柳田を取り上げた本はたくさんあるのですが、最近でたものでは『柳田国男とヨーロッパ』という本があります。成城大学にあった柳田文庫を譲り受けた著者（高木昌史）が、その中にあるヨーロッパ関係の資料を分析し、解説を加えているものです。その資料の中にヨーロッパの昔話、口承文芸研究の具体的な資料があるということで、私自身は見たことはないのですけれども、そこに沖縄関係のものもあるのではないかとと思うので、今後の研究のきっかけになればと思っています。

さて、現在、本学の生涯学習で「知りたいっちゃ沖縄、行きたいっちゃ沖縄」という講座を開講しておりますが、そこで2回話をする機会を得まして、ヨーロッパ、とりわけフランスやドイツなどに関わる沖縄あるいは南島研究の資料であるとか研究動向などをお話しさせていただきました。それについては詳しく話をする時間ありませんので、今日は、私自身がどのようにして沖縄あるいは南島、広く言えば南に関心を持ってきたかをお話ししたいと思います。

用意したレジュメ（別添）をみていただくと、上段右端にまず「郷土研究会」とあって、そこから左に民俗学、美術史、民族学、言語学、国語学、フランス文学、日本文学といったように学問分野が並んでいます。私自身はその様々な学問分野に関わって南島に関する興味を膨らませてきましたし、沖縄にも何度も行かせていただきました。

さて、なぜ「郷土研究会」というのが最初に書かれているのかというと、昔、高校時代に「郷土研究会」という部活動があって、あまり興味もなかったのですけれども、そこで何をやっているのかということがずっと気になっていました。その後、だんだん民俗学に興味をわいてくると、各地にある同じ名称の「郷土研究会」がどういふきっかけでできたのかという疑問がでてきました。それが高校生の頃でした。それから折口信夫の「常世の国」の話を知りかから聞いたか、あるいは『折口信夫全集』を買って読んでいたのでそこで知ったか、いずれにしてもそれに興味を持ったということが沖縄に関心を抱くきっかけとなりました。そして最終的にそれから4～50年を経て久高島にたどり着くことに

岩川 亮: 南島周遊 Field Walker or Flaneur



31 Jan '13.

なったわけです。

それに関連して柳田国男に関してもいろいろと勉強させていただきました。この系統につ

きましては、その後、南方熊楠に関心を抱きまして、熊楠がイギリスに行ったりしていたこともあって、海外と関連付けていろいろと考えるようになりました。その先にあるのが宮本常一で、その方面につきましては今も相変わらず関心を抱いております。それからレジュメには「島」と書いてあって、その左に岡谷公二の名前を挙げています。この人は私自身の問題関心とピッタリと重なるところがあると思っています。岡谷氏は美術史の分野ではゴッホについても研究されていて、ゴッホを何に結びつけているかというところ、土方久功への強い関心から彼を「日本のゴッホ」として研究しています。この岡谷公二の本を読むようになりました。私自身も前から関心があった中島敦をこの視点から見ることになります。その中島敦が土方久功と南洋庁の関係でパラオで会うというようになつなかりを持っている。そういうようなところからだんだんいろいろなものが結びついてきたわけです。土方久功については、那覇で南洋群島に関わる美術に関する展覧会があった時に、彼の選集があるということを知りました。

これは「島」とか「南」に対する関心です。私自身は抽象的、精神的なものに対する関心が強くて、具体的に歴史とか地理とか自然科学や社会科学とは少し違った関心の持ち方で進んでいます。それに関わって明治以降、太平洋戦争期に「南進論」、すなわちアジアへの進出、一方では侵略へとつながっていくものですが、これを経済進出や植民地支配は別にして、憧れとか楽園とか、かたちのない抽象的な思いというものに非常に興味を持って見ているということです。「南進論」については、矢野暢の『南進論の系譜』などいろいろな分野にわたり、さまざまな関心からでてくるのですが、それに関わって精神的な面での南への憧れといったところを考えていて、それに対する関心は今も強く持っています。

南進論といえば必ず植民地支配が語られることになりますが、私自身は植民地支配を大前提としながらも、それに先立つ憧れの部分がどうかたちで様々な活動に表れているかといったところに関心を持っています。それは美術史に関する関心でありまして、私がオリエンタリズム、この場合ヨーロッパにおけるオリエンタリズムについて関心を持って見てきたことに関わっています。これについては、すでにご承知のとおり、1970年代にエドワード・サイードの『オリエンタリズム』が出てから一挙にオリエンタリズムの意味が変わってしまったということを指摘しておかなければなりません。オリエンタリズムというのは本来「東洋趣味」というレベルで使われてきたわけで、オリエンタリズムという言葉自体にはイデオロギッシュな側面はなかったわけです。あるいはオリエンタリストという言葉も使いますね。これもサイードのようにイデオロギーの面から研究すればいろいろと出てくるんでしょうが、一般的な人間の行動の側面としてエキゾチックなものへの憧れ、自分のところのないものへの関心といったものが現れた美的な発言、それを「美術の世界におけるオリエンタリズム」と言っていたと思うのです。それが世界の植民地化、あるいは西洋の支配という状況の中でそういった文化をイデオロギッシュにとらえなおした

のがサイドであったということです。それに対する違和感を私自身は今でも持っています。そういう意味で、人間本来の性格としてオリエンタリズムというのはある、という立場で追求しているわけです。レジュメには「反若桑」と書いてあります。これは、若桑みどりという美術史家がいまして、公共的な場所に女性の裸体像を設置することに対して反発したり非難したりする発言をしていました。彼女は千葉大学の先生だった人ですが、学生を連れて調査させたり、批判させたりするようなことも行っていたようです。それに対して私はいやな感じを抱いていて、それで「反若桑」と書いています。その下に「エロス」という言葉を持ってきたのは、イデオロギーよりもエロスのほうが、同じレベルでは論じることができないにせよ、人間が本来持っている側面のほうが没価値的に大事だと思っています。その先に、「フェリシアン・ロップス」の名前を挙げております。フェリシアン・ロップスはベルギーの画家で、非常にエキセントリックな、あるいは「猥褻」な絵を描く人で、フランスの詩人ボードレールの『悪の華』の挿絵を描いている人です。『悪の華』というのは、お読みいただければわかりますが、エロスに関わる描写が数多くあって、それにあわせて挿絵が描かれています。その挿絵に私自身が魅かれてフェリシアン・ロップスに関心を持ちました。フェリシアン・ロップスについては、日本でも画集が出ていますが、学校の美術教育の中ではあまり取り上げにくいもので、そういう意味であまり知られていない人です。昔、フェリシアン・ロップスがどういう生活をしていたかをうかがわせるフィルムをみたことがあるのですが、それはかなり非道徳的な生活でしたので、美術の世界だけではないのだと感じたわけです。このフェリシアン・ロップスについては、彼の伝記とか美術書などをかなり古いところから集めていますし、フェリシアン・ロップスはベルギーのナミュールの出身で、そこに彼の美術館があるので、そこに行って資料などを集めております。ここでまとめますと、岡谷公二と同じように、私の頭の中では「南」「島」「エロス」といった要素が美術史の世界でひとまとまりにできるような範疇を持っているということです。

レジュメ右下には「ギリシア・ローマ文明」と書いてあります。これはギリシア・ローマ文明の基盤がキリスト教ではないということです。キリスト教倫理であるとか、キリスト教道徳であるとか、ヨーロッパの美術史をみればキリスト教的な美術が支配的であるということは、とくに中世まではそういった傾向が強かった。もちろん市民社会になってもキリスト教道徳の中で美術が形成されていくということがあったのですが、キリスト教以前には言ってみればパガニズムというかキリスト教に対する異教、あるいは神話的世界というのは実に人間的なエロスに満ちた世界であるということで、どこかでそれに通じる部分が出てくるだろうというような思いです。ニーチェの『悲劇の誕生』の中ではそれをアポロ的とかディオニュソス的という対立概念でとらえていますけれども、とくにディオニュソス的な美学というとらえ方が美術史の世界でも民俗学の世界でも通底しているのではないかと考えているところです。

さて、また高校時代にまでさかのぼりますけれども、様々に紆余曲折があってフランス文学を専門とするに至るのですが、高校時代には英文学に親しんでいました。レジュメにはサマーセット・モームの名前を挙げておりますが、モームには「南海もの」と呼ばれるいくつかの短編があって、英語でそれをよく読んでいましたし、これは映画にもなったことがあります。彼は南海に対する関心が非常に強かったということです。その他に、ギッシングやアーヴィングといった作家の作品を英語の勉強でよく読んでいました。

ところで『宝島』の作者であるスティーブンスン、ピエール・ロティ、ラフカディオ・ハーン、それにモーパッサンの4人は、いずれも1850年すなわち19世紀の真ん中の生まれで、この4人を一括りにして考察することは、私の文学研究の課題でもあります。例えば、スティーブンスンはご存知の『宝島』という物語を書いていますし、彼自身も南の島に移住してその経験を小説にしたりしています。ロティは日本に来ましたから、日本に関する著述がある。ハーンも同じです。ハーンは本来はアイルランドの人で、父親がイギリス系アイルランド人、母親がギリシア生まれです。ハーンの名前はラフカディオですが、それはギリシアのレフカス島にちなんでつけられました。ハーンは島根県の松江で教師をしていましたが、その時、松江の人たちはハーンのことをヘルンと発音していたようです。そのように聞こえたということなのですが、カタカナで「ヘルン」と書いているものが多くあります。実際にアイルランドの発音でいうと、「ハーン」ではなく「ヘルン」だといわれています。ハーンは父親はイギリス海軍の軍人で、インドに派遣された際に帰国する船の中で死んでアラビア半島のどこかの海に水葬になったとのこと。さて、ハーンがなぜ関係するのかというと、ハーンは実は子供時代に母親といっしょに父親の故郷に行って住むのですが、そこからいろいろな事情があってフランスに出てフランス語の勉強をしてまた戻ります。その後、20歳頃に米国に渡って図書館に通って勉強に励み新聞記者になります。記者になってセンセーショナルな文章を書いて人気を博しました。ハーンは西インド諸島のマルティニック島に渡って2年間生活して、その様子を描写した文学作品が『西インド諸島の二年間』というものです。すなわち、ハーンもやはり南への関心が強かったということです。モーパッサンも『水の上』という紀行文を残していますが、彼も南への関心があったのではないかと思っています。そういうことで文学的な側面からこの4人には関心がありました。

次に、大学時代には言語学を学びました。言語学と国語学、この2つの学問は学問的方法として、厳密な分析を行う手段としては有益であったと思います。当時の言語学について言えば、構造主義言語学が出てきた頃で、構造主義言語学は方法的に構造主義人類学へと波及し、構造主義人類学の中からレヴィストロースだとかマリノウスキーといった人たちが出たわけです。こうした構造主義的な考え方を学問の方法として関心を持って見ていました。

その次に記号学に移っています。この記号学についても、ものを考える、あるいは分析

するために非常に役に立つものと考えております。この記号学的手法を使って身体論であるとか舞踊、映画などを勉強したいと思っています。これに関しては、中村雄二郎の文化に関するいくつかの著作を読んで、より一層興味を掻き立てられました。中村雄二郎にはバリ島の仮面舞踊について書いた本がありまして（『魔女ランダ考』）、それもバリ島という南の島の風俗や宗教的な祭りから、霊であるとか汎神論的な世界であるとかに関わって民族学であるとか文化人類学とか言ったところに繋がってくるように思いました。

フランス文学の世界ではネルヴァルやボードレール、マラルメ、ヴァレリー、アポリネール、ヴェルレーヌ、ランボーといった詩人たちの作品を読んだり、教えたりしてきましたが、道徳的ではない世界の表現、反道徳的な世界に対する関心が若い時から強くありました。日本文学では「耽美派」というグループ、その中では北原白秋や木下杢太郎という2人の詩人、作家をレジュメに挙げておりますが、反自然主義というものに強い関心がありました。島崎藤村もよく読んでいたのですが、藤村的な世界というものへの反発がだんだんと強くなり、私の中では日本文学の隅に置かれるようになりました。それは和歌の世界でも同じで、和歌では新古今和歌集に対する思い入れが強く、その反対に万葉集やアララギといった世界に対しては、私自身、かなり否定的な見方をしていることが多い。万葉集については読者も研究者も多いので圧倒されますが、なかなかそこに入っていくことができない心情があります。白秋には『邪宗門』という詩集があります。杢太郎は東北帝国大学医学部の教授だったのですが、本名は太田正雄といます。彼はサイドワークとしてキリシタン研究をしていて、その影響が杢太郎の文学の中にもさまざまに表れてくるというふうに私自身は考えています。それが南蛮やキリシタンに対する関心につながっていく。そして、国語学者で『広辞苑』を編集した新村出も南蛮に関わるものを様々に書いていて、それらに親しんでいました。これも、私のオリエンタリズム研究の背景になっています。

次に、フランス東洋学についてです。日本にはもちろん東洋学があり、進んでいる学問だと思いますけれども、フランスの東洋学もけっこう発達していて、とくにイスラム研究の分野などでは様々な研究が昔からなされています。フランスに一番近いところにイスラム諸国があるのでフランスがイスラムに関心を持つのはよくわかるし、フランスの植民地、チュニジアとかモロッコとか関わりのある国々があります。それから高井清仁さんの名前を挙げておきます。彼は東京外国語大学アラビア語学科を卒業し、その後エジプトに行ったり本学にも勤務したりしていました。彼にいろいろなところに連れて行ってもらって、イスラム関係の研究の一端を見せてもらったりしました。その背景にはエジプトに関わってナポレオンやエジプト遠征に随行したジャンポリオンといった言語学者、あるいは革命以前のフランスにおける植民地生まれの詩人たちがいるわけですが、そうした人たちの作品が持っている性格というものが、いわばオリエンタリズムに関わる部分を多く秘めている。そうしたことで、この部分も私の関心の一端に入ってくる。それで勉強しなければ

ばいけないということで、最初の頃は前嶋信次や石田幹之助といった人たちの著作を読んでいたのですが、さらに後藤末雄や宮崎市定などの本を少しずつ繙くようになりました。

それからフランス右翼についてです。レジュメにはモーリス・バレスの名前を挙げておられます。彼は文筆家兼政治家です。この人もやはり東洋に関わるもの、オリエンタリズムに関わるものをいくつか書いています。あるいは、美的な活動、美学的な面でも様々な発言をしている人で、何冊か彼の本を買い集めて書斎に飾ってあります。そうした右翼といった思想、国家主義的な思想を持った人たちが持っている美的感覚、美的意識というのは、イデオロギーは別にして、まったく感覚的な印象ですが、オリエンタリズムに関わる、あるいは美的なものの追求に関わるものを持っているような気がするのです。そうした意味で、亀井勝一郎など日本浪漫派と呼ばれるグループの人たちが持っている美意識というのは、何かそういうイデオロギーとは関係ないとは思いますが、何かがあるという感覚を今でも持っています。それは小林秀雄に通じるような気もしないではない。そうしたところからフランスの右翼についても考えたりしていました。日本の右翼のことでいうならば、大川周明という人を挙げています。この大川周明のことが気になっていて、大川周明については姫路獨協大学の塚健洋や麗澤大学の松本健一などが書いています。大川周明自身は回教に関する『回教概論』という本を書いていて、イスラムに対して強い関心を抱いていたようです。さらに、ヨーロッパの植民活動に対する批判だとか、そういう方面から大川周明はイスラムに深入りしているように感じられました。その政治的、国家主義的、右翼的な部分と美学がどうもリンクしているような、そんな気がしています。それが大川周明を挙げた理由です。そうした東洋に対する関心というのは、私自身は大学の東洋思想史という授業で金岡秀友という仏教学の先生から仏教についての講義を受けて、非常に関心を持って、インド学やサンスクリットの授業にも出たりして、東洋思想に対しては大学時代に関心を持つようになりました。あるいは、中村元の本を読んだり、東洋学に対しては今でも関心を持っています。

そして次に歴史研究です。歴史学については歴史学を専門とする本学の教授陣が研究発表されているのをみながら「こういう風に勉強したいものだ」と思っていました。私は大学時代に二宮宏之先生からフランス社会史あるいは心性史の講義を受けていまして、高橋幸八郎とかマルク・ブロックとかアナル派の話をお聞きされました。二宮先生自身の学問的軌跡、最初のうちは唯物史観的な見方で勉強されていたことがあるのですが、そうした個人的な思想の推移というようなものを聞きながら、歴史の研究もある意味で常におこなっていただかないといけないと思っていました。自分の中では日本史の網野善彦の列島概念で日本の歴史を見ていく見方や、西洋中世史、社会史の阿部謹也などに関心を持って読むことができました。もう一つ、歴史学の分野では、私自身はヨーロッパを対象としていますから、ボン大学のヨーゼフ・クライナー先生の書いた沖繩学に関するものを読んだりして、その方面からも沖繩、とくに沖繩の宗教について関心を持っています。そのへんではウ

ーン大学にいたと思うのですが、住谷一彦が南西諸島の宗教についての論文などを書いていますし、アカマタ・クロマタについてもこの人は書いていまして、非常におもしろかったですね。

最後になりますが、2012年12月の下旬に本学生涯学習の受講生を引率して沖縄を訪れた時に「沖縄にはお寺はないのですか」という質問を受講生から受け、「お寺はあると思います。例えば崇元寺もありますし、教団の活動などもあるんじゃないかと思いますよ。」と答えておきましたが、神道という名前で沖縄の土着的な宗教を語るべきなのかどうかわからなくなりまして、神道、とくに日本のについてはわからないところがいっぱいあります。聞かれて答えられないというのもまずいなと思って、仲松弥秀の本などを読んでいるとだんだんわかってきました。西洋的な手法での研究が多いとは思いますが、そうではなくもっと実体としての信仰というものを考えていきながら、沖縄の神というものについてももっと知識を深めないと答えられないという羽目に陥るようになってきました。それは先日の沖縄ツアーで見た亀甲墓についても自分で勉強しなければいけないと今は思っています。

あと、レジュメにはフランス近代の音楽とありまして、これがいったいどういようにつながっていくのかわからないと思いますが、フランス近代音楽という世界の中で、とくにマラルメやヴァレリーに関わって、あるいはネルヴァルなども関わってくるとは思うのですが、キリスト教とは違う精神的な存在というもの、あるいはもう少しわかりやすく言えば、ギリシア時代のギリシア文明の中の、あるいは神話の中のニンフとかもっと別の、キリスト教ではない神がフランス近代史の中に出てくるのですが、それと音楽との関係について、音楽をやっている人たちといま音楽と詩ということを勉強していて、いずれこれもどこかでつながってくるのではないかと思っています。

私がこの共同研究に参加して沖縄に行くようになって随分になりますが、私自身は沖縄に行って「周遊」している、それを英語で Field Walker、あるいはフランス語で Flaneur と呼びたいのです。例えば、実際にネルヴァルがエジプトに行って様々な経験をし、様々な記録を残していますが、その構成をみると半分は創作的、文学的な作業としてやっている。歩きながら調査をするのは Field Worker なのでしょうけれども、ネルヴァルがやっていることは、紀行文学作品に架空のものをどんどん入れていってしまう。文学的作業としてそういうことをやっているということがあって、それを評して「Flaneur の文学」という言い方をする人もいます。そんな感じが私自身にもありまして、とても科学的といえるものではないのですが、自嘲気味にそのように言っています。

以上が私がこれまでに沖縄や南島に関わってやってきたことですが、始まりもそうだったのですが、これからもぼや〜っとしながら自由にやっていきたいと思っています。

ご清聴、ありがとうございました。